

# 福井方言における韻律階層と韻律句形成

人文学部日本文化学科

鈴木花菜

2023 年（令和 5 年）1 月提出

## 要旨

本稿は福井平野中心部に分布する無アクセント方言（本稿では、福井方言とする）のイントネーションによる句切れについて記述、考察したものである。

日本語の多くの方言には階層的な韻律階層が存在することがさまざまな研究者によって指摘されている。ただし、その階層の定義は弁別的な語アクセントがあることが前提にされているところがあり、非弁別的な無アクセントの福井方言には単純には適用できないところがある。一方、新田（1987）によれば、福井方言の韻律には、ゆすり音調と文節末卓立という2つの異なる句切れを表す音調が存在し、その2つの韻律的特徴が階層関係にあることが示唆されている。

筆者が福井方言話者に面談調査を行った結果、新田（1987）の指摘通り、ゆすり音調によってまとまる句と下降音調によってまとまる句の2層の韻律階層があるということが明らかになった。また、これら句切りに用いられる2つの音調は、原則として文節末に現れるものであるが、現れないことがあることがわかった。

本稿では、特により上位の階層で現れる「ゆすり音調」が表示する韻律的なまとまり（韻律句）について、どのようなときにゆすり音調が消去され、ひとまとまりの韻律句を形成するのかという観点から考察を行った。考察の結果、以下の3点を本稿では主張する。

①3つのNPが並んで大きなNPを構成するとき、より意味的に近い関係のNPどうしがまとまって1つの韻律単位となることがある。

②統語的な句を形成する文節間では、ゆすり音調が消去され1つの韻律単位となることがある。

③フォーカスがある語の後の音調はフォーカスが現れた際の規則によってゆすり音調と下降音調のいずれも消去され、1つの韻律単位となる。

以上のことから、福井方言では、ゆすり音調によって構成される韻律句の境界設定には意味構造、統語構造、情報構造のいずれも関わるものといえる。考察の結果、これらのうち、情報構造がゆすり音調の出現・非出現に最も強く関わる一方で、意味構造がゆすり音調の出現・非出現に与える影響は相対的に弱いものと考えられる。

## 目次

1. はじめに	1
2. 福井方言の概要	1
3. 先行研究と本稿で扱う問題	2
3.1. 日本語の韻律構造	2
3.1.1. 統語・韻律写像原理	3
3.2. ゆすり音調	3
3.2.1. ゆすり音調の典型的タイプ	3
3.2.2. ゆすり音調の現れる位置	4
3.2.3. 句切りの音調	4
3.2.4. 文法的な切れ目と句切りの音調	5
3.3. 本稿で扱う課題	7
4. 調査の概要	7
5. 調査結果の整理	9
5.1. ゆすり音調	9
5.2. 下降音調	11
5.3. まとめ	11
6. 議論	11
6.1. どこでゆすり音調が現れないのか	12
6.1.1. 属格で結ばれる名詞の間	12
6.1.2. 名詞+助詞の連続体と動詞の間	13
6.1.3. フォーカス以降のゆすり音調	16
6.2. まとめ	17
7. おわりに	18
参考文献	19
【付録】 実験文一覧	20

## 1. はじめに

本稿では、福井平野中心部に分布する無アクセント方言（以下、福井方言とする）のイントネーションについて記述する。

イントネーションとは、単語の意味を超えた文や句レベルでの後語彙的 (post-lexical) もしくは語用論的 (pragmatic) 意味情報を伝えるために用いられる、超文節的 (suprasegmental) で構造化された音声情報、と定義されている (Ladd 2008)。より具体的な機能としては、フォーカスを表示する機能、単語どうしの意味の限定関係や意味的な一体性を表示する機能、疑問などの文のモダリティを表示する機能、大きな意味の区切りを示したり、発言がまだ終わっていないことを示したりする機能の4つが挙げられる (郡 1997)。

日本語のイントネーションを決定する要因としては、①アクセント、②統語構造、③モダリティ、④談話構造、⑤年齢や性別などのパラ言語情報などが挙げられる。これらを言語分析上のレベルで分類すると、①が語彙レベル、②・③が統語レベル、④が談話レベル、⑤がその他のレベルとなる (前川 1990)。

従来の日本語のイントネーション研究は、弁別的な有アクセントを前提としたものであり、イントネーションの句切れに関する定義がアクセントによってなされていることが多い。福井方言のような無アクセント方言におけるイントネーションに関する研究は多くない。本稿では、非弁別的な無アクセントの特徴を持つ福井方言におけるイントネーションによる句切れのあり方について記述することを目的とする。

2節で福井県内の方言の概要、3節で先行研究と本稿で扱う課題、4節で調査の概要、5節で調査結果の整理、6節では5節で得られた事実に関する議論、7節で本稿のまとめを述べる。

## 2. 福井県内の方言の概要

福井県方言は嶺北方言と嶺南方言に大きく二分される。その方言境界は南条郡南越前町と敦賀市の市町境界とほぼ一致し、南越前町側が嶺北方言、敦賀市側が嶺南方言となる (加藤 1992)。

さらに、嶺北方言は福井平野を中心とする嶺北西部方言と勝山市・大野市を中心とする嶺北東部方言に分けられる。両方言はアクセント体系が大きく異なり、西部は弁別的なアクセントを持たない無アクセントあるいはN型アクセントが優勢であるのに対し、東部はアクセントの区別が明瞭な多型アクセントが優勢となっている (松倉 2022, p. 12)。

本稿では西部方言の特に無アクセントが優勢である福井平野中心部の方言を扱う。

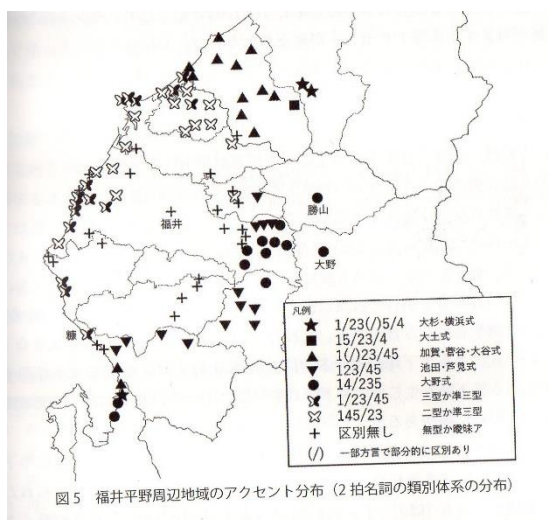


図1 福井平野周辺地域のアクセント分布  
(松倉 2022 p. 15)

### 3. 先行研究と本稿で扱う課題

ここでは、日本語の韻律構造に関する先行研究とゆすり音調に関する先行研究をまとめ、本稿で扱う課題について述べる。

#### 3.1. 日本語の韻律構造

日本語（東京方言）の韻律には階層があるということが指摘されている。このことはさまざまな研究者によって指摘されているが、定義や階層の名称もまた研究者によってさまざまである。ここでは、Kubozono (2007)における日本語の韻律階層の定義をまとめることとする。

Kubozono (2007)は、日本語（東京方言）のイントネーションには Utterance（発話）の下に2つの韻律的なレベルがあると述べている。それが major phrase と minor phrase である。Utterance は1つ以上の major phrase によって構成され、major phrase は1つ以上の minor phrase によって構成される。

minor phrase は句頭の上昇と1つの語アクセント (lexical accent) が実現する領域と定義している。一方、major phrase はダウンステップの領域として定義している。ダウンステップについても研究者によって定義が異なるが、ここでは簡単に minor phrase のピッチが階段状に下がっていく現象のことを指すものとしておく。

このように、日本語（東京方言）の韻律には階層構造があるということが今までの研究によって指摘されている。しかしながら、例えば上記の minor phrase の定義を見れば明らかのように、この階層構造は弁別的なアクセントがあることを前提とした定義によって示さ

れている。そのため、無アクセントの福井方言にはいわゆる「日本語の韻律階層」と呼ばれるものをそのまま適用することはできない。このことが無アクセント方言におけるイントネーション研究、特に韻律句のまとまりと句切れに関する条件の研究が進まない要因とも考えられる。一方で、後に述べるように、福井方言にも階層的な韻律構造が想定できることを示唆する研究が存在する（新田 1987）。本稿の1つの目的は、この新田が示唆する福井方言における階層的な韻律構造について、より詳細な分析に基づいて、それが福井方言に確かに存在することを示すことにある。

### 3.1.1. 統語・韻律写像原理

石原（2014）は統語上の「句」の境界が韻律上の「句」の境界に置き換えることで、音の情報を通じて文構造の解釈が可能となる、と述べている。このような統語構造と韻律構造の対応関係を「統語・韻律写像原理(syntax-prosody mapping principle)」と呼ぶ。この原理は日本語（東京方言）の場合、次のように一般化できる。

一般化： 統語構造に於ける句の始まりは、韻律構造に於ける韻律句の始まりに写像され、対応関係を示す。（石原 2014 p. 21）

つまり日本語（東京方言）では、統語的な句の始まりと韻律の始まりは一致するということである。一方で、このことが無アクセント方言においても同様に成り立つかは必ずしも明らかではない。無アクセント方言の1つである福井方言における統語上の「句」の境界と韻律上の「句」の境界の関係については、6節で詳しく検討する。

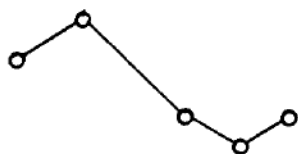
### 3.2. ゆすり音調

北陸地方には「ゆすりアクセント」、「ゆすり調」、「うねり調」などと呼ばれてきた独特の音調がある（新田 1987）。また、この音調のことを山口（1985）では「聞手の注意をひきつけ、たえず反応を確かめつつ、話手自身の余裕を保つ」（山口 1985, p. 216）という機能から「間投イントネーション」と呼んでいる。本稿では、この音調のことを聴覚的な印象から「ゆすり音調」と呼ぶこととする。ここでは、ゆすり音調の機能を新田（1987）の研究をもとにまとめる。

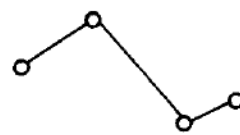
### 3.2.1. ゆすり音調の典型的タイプ

新田によれば、ゆすり音調の典型的なタイプは以下の図1に示す4つである。

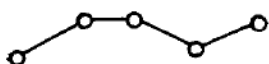
A. コ「レ」モ「ー」ー



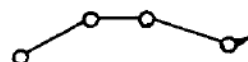
a. コ「レ」モ「ー」ー



B. コ「レ」モ「ー」ー



b. コ「レ」モ「ー」ー



「 大きい上昇

「 小さい上昇

『 モーラ内での大きい上昇

『 モーラ内での小さい上昇

㇇ 大きい下降

㇇ 小さい下降

㇇ モーラ内での大きい下降

㇇ モーラ内での小さい下降

図2 ゆすり音調のタイプ (新田 1987, p. 20)

A, a, B, b の分類は以下のとおりである。

A・a 音調のくぼみ直前にはっきりとした下降がある。

B・b 音調のくぼみはあるが、直前の下降は現れない。

A・B 句末のモーラが2モーラ分延長されたもの。

a・b 句末のモーラが1モーラ分延長されたもの。

今回の調査ではA・aタイプのみが現れていた。A・aのくぼみの前の下降の位置は、のぼされるモーラの直前である。その下降が十分行われるように、のぼされるモーラの直前のモーラ（あるいは音節）は高い場合が多くなる。今回扱うデータはすべて、のぼされるモーラの直前の音節が高くなっていた。

### 3.2.2 ゆすり音調の現れる位置

ゆすり音調は文節末のいずれかに現れる。

(1) ショーガッコーニ#イルジブン#ガッコーノ#ニカイカラ#トビオリテ#イッシュー  
カンホド#コシオ#ヌカイト#コトガ#アル

〈小学校に居る時分、学校の二階から飛び降りて、一週間ほど腰を抜かしたことがある〉

※ “#” はゆすり音調が現れる可能性のある場所

新田 (1987) は (1) のどこにゆすり音調が現れやすいか、また全体の頻度はどのくらい

かということについては、文の構造や topic/focus などの情報構造、もしくは発話のスタイル、年齢や性別などの言語外的要因が絡む可能性があり、今後解明していくべき問題と述べるにとどめている。

### 3.2.3. 句切りの音調

新田 (1987) は、福井市方言の句切りの音調として、①句頭の音調、②文節末卓立の音調、③ゆすり音調 (新田 1987 ではくぼみ音調)、④ゆすり音調の強いかたちの4つを挙げている。①～④の音調について以下で説明する。

#### ①句頭の音調

諸方言で一般的にみられるもので、次のようなかたちをとる。

- (ア) ○<sup>1</sup>○…○○ (イ) (ウ) の条件以外するとき  
(イ) [○…○○ 第2モーラが撥音、長音の後半、イの母音のとき  
(ウ) ○○[…○○ 第2モーラが促音、無声化母音のとき

福井市方言には平らな音調の連続があるが、この音調は切れ目がないという表示をする。この平らな音調の連続と①の句頭の音調が同時に現れる場合には、①の頭から平らに続き、次の①の音調の手前までが1句となって、1つのまとまりが現れる。①の音調には、句の頭をマークする方法で区切るという境界標示機能を持つものといえる。

#### ②文節末卓立の音調

①と異なり、句の終わりをマークすることで切れ目を表示する音調で、次のかたちをとる。

- (エ) …○[○]○…

②が平らな音調と一緒に現れた場合、切れ目を表示すると同時にマークしたところまでのまとまりを示す機能をもつ。また、ゆすり音調と同様に任意の文節末に現れうる。

#### ③ゆすり音調

ゆすり音調は先に挙げた、聞き手をひきつけたり、語調を整えて話者自身の余裕を保つといった間投的機能のほかに、②の音調と同様の句を切るはたらきをもつ。②と異なるのは、多くの場合、ゆすり音調の後には音声連続の時間的切れ目のポーズが現れる点である。ポーズは、前の音調の上下関係を無効にし、新たな「音調立て」を要求する。新たな「音調立て」は①の句頭の音調とほぼ同じであるが、①の句頭の音調はポーズが必ずしも存在しないの

---

<sup>1</sup> “[” はピッチの上昇を、“]” はピッチの下降を示す。



に対して、新たな「音調立て」はポーズが必ず存在するという点で異なる。

#### ④ゆすり音調の強いかたち

ゆすり音調を行う際に、音調のくぼみの前の義務的な下降の前が卓立することがある。この卓立はその後の下降をより際立たせるためのものであり、②の卓立とは別のものである。

### 3.2.4. 文法的な切れ目と句切りの音調

新田（1987）は、3.2.2で挙げた①～④までの句切りの音調は、可能性としてはどの文節にも現れうるものであるが、現れる位置は文や連文節内の文法的な切れ方に沿ったものでなければならないと指摘しており、これを逸脱した場合は不自然な音調になると述べている。(2)は句切りの音調の位置が不自然な例である。

- (2) \* [シンカンセンガ モノ[スン] オク[レ]テ[一 (① ② ③)<sup>2</sup>  
(新幹線が ものすごく 遅れて)

(2)の文法的な切れ目は以下のとおりである。

シンカンセンガ## モノスン# オクレテ一###

※#は文法的な切れ目を示し、数が多いほど大きな切れ目を表す。

(2)の場合、初めの2文節が平らな音調で結び付けられ、音調上の切れ目は②の音調でマークされている「モノスン」の後にあるため、シンカンセンガ モノスン / オクレテ一という切れ方になる。ところが、文法的には「モノスン」と「オクレテ」の間の切れ目よりも「シンカンセンガ」と「モノスン」の間の切れ目の方が大きいため、(2)の音調の切れ目は文法的な切れ目の位置（文節のまとまり）を無視した切れ目になってしまう。このような文法的なまとまりを無視した音調は不自然なかたちの音調になる。

より自然な音調にするためには、以下の音調にする必要がある。

- (2') [シンカンセン[ガ] モノ[スン] オク[レ]テ[一

このように、句切りの音調の位置は文法的な切れ目に沿ったかたちで決まる。

さらに新田（1987）は、句の終わりをマークする音調である、②文節末卓立の音調と③ゆすり音調どうしについても文法的な切れ目とかわりがあると指摘している。

---

<sup>2</sup> 文節ごとの音調を示す。①は句切りがなく平らな音調を示す。

- (2-0) シンカンセンガ## モノスン# オクレテ##
- (2-1) [シンカンセン]ガ[一 モ[ノス]ン[一 オ[クレ]テ[一 (③ ③ ③)
- (2-2) [シンカンセン]ガ[一 モノ[スン] オ[クレ]テ[一 (③ ② ③)
- (2-3) [シンカンセン[ガ] モノ[スン] オク[レ]テ[一 (② ② ③)
- (2-4) \*[シンカンセン[ガ] モノ[ス]ン[一 オ[クレ]テ[一 (② ③ ③)

以上の例について、(2-1) から (2-3) については可能であるが、(2-4) は文法的切れ目が##のときに②を用いており、#のときに③を用いているため不適當である。これは、音調の切れ方にも文法の切れ方と同じように大きさの違いがあるためである。②はポーズなしでも連続していけるのに対して、③はポーズがあり大きな切れ目を作るという性質を持っている。この性質から②の方が③と比べるとより小さな句切れであると考えることができる。つまり、2つの文節どうしを比べると、文法的切れ目が##のときに②を用い、#のときに③を用いるということは、より大きな文法的切れ目に対して、より小さな音調の切れ目を用いることになり、不自然な音調の切れ目になるということである。

以上のことをまとめると次のようになる。

制限：②文節末卓立は③ゆすり音調よりも大きな文法的切れ目にもちいることはできない。

この新田(1987)の指摘は、福井方言の音調にもなんらかの韻律的な階層が存在することを示唆している。

### 3.3. 本稿で扱う課題

新田(1987)から、福井方言には句末の音調として文節末卓立とゆすり音調の2つが存在することが明らかになっている。さらにこの2つの音調には階層構造が存在することも示唆されている。ただし、新田(1987)ではゆすり音調がどのようなときに現れ、どのようなときに消去されるのかということについては言及されていない。福井方言における韻律構造のあり方をより詳細に明らかにするためには、特に韻律階層においてより上位の層に当たると考えられるゆすり音調が形成する韻律句が、どのように形成されるのかを明らかにすることが重要である。

そこで、本稿では、新田(1987)によって得られた示唆を出発点にして、どのようなときにゆすり音調が消去されて、ひとまとまりの韻律句を形成するのかという観点から、ゆすり音調の韻律句形成における役割について考察を行う。その際、石原(2014)などの日本語(東京方言)における韻律構造と統語構造との関係についての研究を参考にしつつ、より下位の階層に位置する下降音調との関係にも留意して考察する。

## 4. 調査の概要

本稿で扱うデータは、筆者が対面の調査によって得たものである。調査協力者は福井県武生市出身の50代男性1名である。調査は調査票を方言形の会話調に読み上げてもらう方式を採用し、1文あたり5回繰り返してもらった。

調査票はIshihara(2016)から引用したものを対象方言に合わせて適宜修正したものである。今回の調査に用いる例文は主には統語構造と韻律構造の関係性を見るために、統語境界の有無がコントロールされたものである。さらに、フォーカスの有無という情報構造が韻律に韻律句の形成に影響を与える可能性を考え、疑問詞を含んだ文についても用意した。文のかたちは以下のとおりである。

#### 基本文型

N1 N2 N3 PP V

実験文は3つの名詞が後置詞句(PP)と動詞に先行するかたちをとり、最初の名詞3つをそれぞれN1、N2、N3とする。これが基本的な文型となる。ただし、実験文2については、Ishihara(2016)の実験文のままでは口語的でないと判断しPPを省略したかたちになっている。

統語境界について以下のように設定している。

[-Boundary] [[N1 N2 N3]<sub>OB</sub><sup>3</sup> PP V]<sub>VP</sub>

[+Boundary] [N1 N2]<sub>SU</sub> [[N3]<sub>OB</sub> PP V]<sub>VP</sub>

また、これらの木構造をIshihara(2016)より引用して示す。

---

<sup>3</sup> OB=Object、SU=Subject、VP=動詞句 (Verb Phrase) とする。

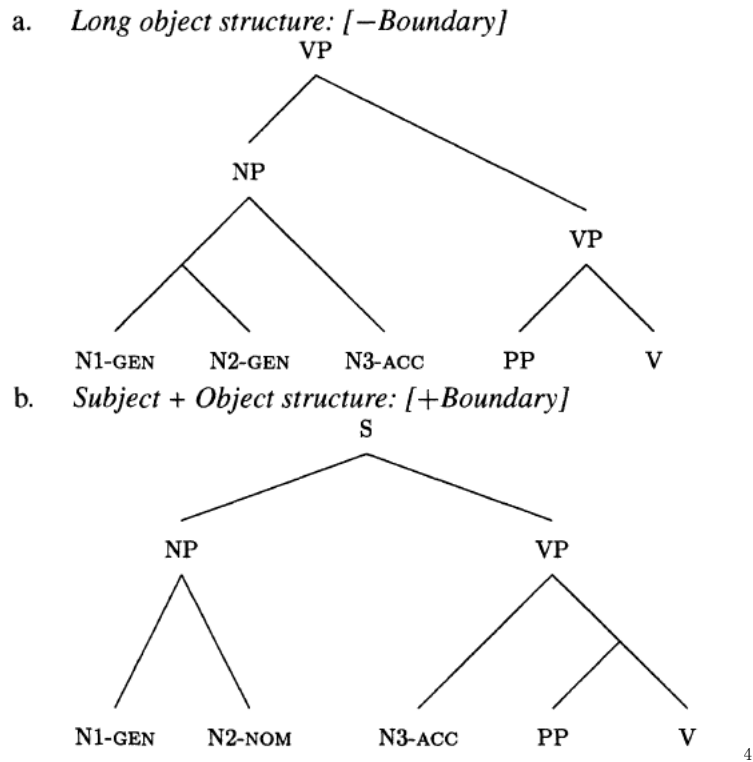


図3 実験文の木構造(Ishihara 2016 p.1402)

統語境界がない (-Boundary) 文では、N1、N2、N3 で1つのNP (名詞句) を構成する一方で、PP と V が VP を構成するかたちとなっている。この文では N1、N2、N3 の全体が目的語として機能し、主語は存在しない。これに対して、統語境界がある (+Boundary) 文では、N1 と N2 が NP を構成し、文の主語となっており、N3 は単独で目的語となっている。統語的な境界 (NP と VP の境界) は N2 と N3 の間に存在する。実際に調査で用いた例文は以下のとおりである。

[-Boundary] ナオミの 姉の ワインを ワイングラスで 飲んだ。  
 (N1-GEN N2-GEN N3-ACC PP V)

[+Boundary] ナオミの 姉が ワインを ワイングラスで 飲んだ。  
 (N1-GEN N2-NOM N3-ACC PP V)

フォーカス (疑問詞) については、nani-o という疑問詞を N3 の位置に挿入している。フォーカスを挿入した文は以下のとおりである。

<sup>4</sup> GEN=属格 (genitive)、ACC=対格 (accusative)、NOM=主格 (nominative) とする。

[-Boundary, +Focus] ナオミの 姉の 何を ワイングラスで 飲んだの？  
(N1-GEN N2-GEN N3-ACC PP V)

[+Boundary, +Focus] ナオミの 姉が 何を ワイングラスで 飲んだの？  
(N1-GEN N2-NOM N3-ACC PP V)

以上の [-Boundary, -Focus] [-Boundary, +Focus] [+Boundary, -Focus] [+Boundary, -Focus] の 4 パターンを 1 セットとして、同じかたちの実験文 5 セットを調査した。具体的な実験文については末尾の付録を参照されたい。

実験文 1 と 2 については追加の実験文を用意した。実験文 1 は [+Boundary] の実験文の PP を省略した文、 [+Boundary] の実験文の主格の位置を N1 と N2 の間に変更した文、実験文 2 についてはもともと PP が省略されていたため、 [+Boundary] の実験文の主格の位置を N1 と N2 の間に変更した文を用意し調査を行った。

[+Boundary, -Focus, PP 省略] ナオミの 姉が ワインを 飲んだ。  
(N1-GEN N2-NOM N3-ACC V)

[+Boundary, -Focus, PP 省略, 主格が N1 と N2 の間]  
ナオミが 姉の ワインを 飲んでしまった。  
(N1-NOM N2-GEN N3-ACC V)

## 5. 調査結果の整理

ここでは、調査によって得られた事実を整理していく。

### 5.1. ゆすり音調

調査の結果、新田 (1987) が指摘する通り、ゆすり音調は文節末に現れ、韻律的な句切りを担っていることがわかった。これ以降、本稿ではゆすり音調によって形成される韻律的な句のことを「韻律句」と呼ぶこととする。このゆすり音調は、文節末に現れず大きな韻律句を形成する場合がいくつかある。①属格で結ばれる名詞の間、②名詞+助詞の連続体と動詞の間、③フォーカス以降、という統語構造や情報構造の問題と考えられるものと④あまり聞かれない話をするときという語用論の問題と考えられるものの 4 点である。以下に、ゆすり音調が現れないときの状況と例を示す。

#### ①属格で結ばれる名詞の間

属格で結ばれる名詞の間には、ゆすり音調が現れないことがある。ただし、必ず現れないということではなく、特に結びつきの強い名詞どうしの場合のみ、ゆすり音調が現れないと

考えられる。このことについては 6.1.1. で詳しく述べる。

(3) ユウイチの親父が家売った。

(ユウイチノトーチャンガ) (イエオウツタンヤ)。

※ ( ) はゆすり音調によって形成される韻律句を示す。

#### ②名詞+助詞の連続体と動詞の間

先に示した基本文型の PP と V の間にはゆすり音調が現れず、PP と V で 1 つの韻律句を構成している。ただし、PP が省略されている実験文 2 の場合も NP3 と V の間にはゆすり音調が現れず、NP3 と V で 1 つの韻律句を構成している。このため、「名詞+助詞の連続体と動詞の間にはゆすり音調が現れない」と表現する。

(4) ナオミの姉のワインをワイングラスで飲んだ。

(ナオミノ) (ネーチャンノ) (ワインオ) (ワイングラスデノンダンヤ)。

この「名詞+助詞の連続体と動詞の間」におけるゆすり音調の現れについては 6.1.2. で詳しく述べる。

#### ③フォーカス以降

フォーカス以降はすべての実験文においてゆすり音調が現れず、1 つの韻律句となっている。

(5) ナオミの姉の何をワイングラスで飲んだの？

(ナオミノ) (ネーチャンノ) (ナニオワイングラスデノンダンヤ) ?

このフォーカス以降における音調の現れ方については 6.1.3. で詳しく述べる。

#### ④あまり聞かれない会話のとき

周りに聞かれないために、小声で早口に話すようなときにはゆすり音調がすべて消え、文全体が 1 つのまとまりとなる。これは山口 (1985) の述べている「聞手の注意をひきつけ、たえず反応を確かめつつ、話手自身の余裕を保つ」という機能によるものであると考えられる。得られたデータの中で、ゆすり音調が 1 つも現れなかった文を以下に挙げる。

(6) ユウイチの親父が家売った。

(6a) は特に文脈等の指定なしで得られた音調、(6b) は近所の噂話のように発話するよう

指定したときに得られた音調である。

(6a) (ユウイチノ) (トーチャンガ) (イエオウツタンヤ)。

(6b) (ユウイチノトーチャンガイエオウツタンヤ)。

調査協力者の方からは、(6a)は悠長な感じがするため、あまり聞かれない噂話のような場合にゆすり音調を用いることは少し不自然である、という意見をいただいた。噂話のような、早く話し終えてしまいたい発話には、山口(1985)のいう「聞手の注意をひきつけ」ている余裕がないため、ゆすり音調が用いられないものと考えられる。

## 5.2. 下降音調

ゆすり音調と比べてより小さな単位の句切りを担っていると考えられるのが、文節末から数えて2つめの音節のピッチが高くなり、文節末の音節が低くなる音調である。本稿ではこの音調のことを「下降音調」と呼ぶ。この音調があるといえるのは以下のようなピッチの高低を持っているからである。

(7) ユウイチの親父が家を買った。

(ユウイ[チ]ノ トー[チャン]ガ) (イ[エ]オ ウツタン[ヤ])。

※[]はピッチの高低を示している。

1つ目のゆすり音調で句切られた韻律句のピッチを見ると、”ユウイ[チ]ノ トー[チャン]ガ”となっている。これは、新田(1987)のいう「平らな音調は、切れ目を示すのとは逆のはたらきをし、この音調が続いているときには切れ目がないという表示である」(p. 31)ということ的前提とすると、”ユウイチノ”と”トーチャンガ”の間には切れ目があるということになる。切れ目はゆすり音調によって形成されるより大きな韻律句のなかにあるため、この文節末のピッチの下降は、ゆすり音調よりも小さな単位の句切りを担う音調である<sup>5</sup>。つまり、この方言においては、ゆすり音調と下降音調とが韻律構造上階層関係にあるということになる。これは、すでに述べたように新田(1987)が福井方言において階層的な韻律構造が存在することを示唆していたことも符合する。

さて、下降音調は原則として文節末に現れるが、現れない場合が1つある。それは、フォーカス以降のフレーズである。フォーカス以降のフレーズは文末のモダリティを示す上昇音調を除き平板になっており、下降音調は現れない。以下のとおりである。

---

<sup>5</sup> なお、この音調は、新田(1987)で指摘されている「文節末卓立」と似ているが、文節末から数えて2つめの音節が卓立されているため、本稿では「下降音調」として扱うこととする。

(8) ナオミの姉の何をワイングラスで飲んだの？

(ナオ[ミ]ノ) (ネー[チャン]ノ) (ナ[ニヲ]ワイングラスデノンダン[ヤ])?

このフォーカス以降における音調の現れ方については 6.1.3. で詳しく述べる。

### 5.3. まとめ

以上から、福井方言には句切りの音調としてゆすり音調と下降音調が存在し、この2つの音調には階層構造が存在することが明らかになった。また、ゆすり音調は条件によっては消去されることがあるということがわかった。次の6節で、ゆすり音調が消去される条件について詳しく分析・考察していく。

## 6. 議論

ここでは、調査で得られた事実によって、ゆすり音調によって形成される韻律句が統語構造や情報構造とどのような関係を持っているのかについて考察する。

### 6.1. どこでゆすり音調が現れないのか

5節では、ゆすり音調が現れない場合として以下の4点を挙げた。

- ①属格で結ばれる名詞の間
- ②動詞の直前の名詞+助詞の連続体
- ③フォーカス以降
- ④あまり聞かれない会話のとき

以上の4点のうち統語構造や情報構造とかかわりがあるものは①～③までであるため、ここでは、①～③について扱うこととする。このうち①と②は必ずゆすり音調が現れないという条件ではないため、どのようなときにゆすり音調が現れなくなるのかという条件について詳しく考察する。③については、ゆすり音調が現れないことによる効果について標準語のイントネーションと比較しながら考察する。

#### 6.1.1. 属格で結ばれる名詞の間

今回得られたデータの中でNP どちらの部分でゆすり音調が現れなかったのは以下のときである。

NP1+NP2 の間にゆすり音調が現れなかった場合

ナオミの姉がワインをワイングラスで飲んだ。

(ナオミノネーチャンガ) (ワインオワイングラスデノンダンヤ)。



ユウイチの親父の家を売った。

(ユウイチノトーチャンノ) (イエオウツタンヤ)。

NP2+NP3 の間にゆすり音調が現れなかった場合

ベルリンの友人の荷物を郵便局から送った。

(ベルリンノ) (トモダチノニモツオ) (ユウビンキョクデオクツタンヤ)。

上野の物乞いのライターを駅前で見つけた。

(ウエノノ) (コジキノライターオ) (エキマエデミックetanヤ)。

NP1+NP2 の間にゆすり音調が現れなかった場合に関しては、NP2 が親族名詞という共通点がある。ここから、「誰の」姉なのか、「誰の」父なのかを明示しないと「姉」や「父」と定められないような非飽和的な名詞の場合、その名詞の前にはゆすり音調が現れず、その直前の NP とともに1つの韻律句になることが考えられる。ただし、今回の調査では「ナオミの姉」という実験文が4例あったが、NP1 と NP2 が1つの韻律句となったのは「ナオミの姉が」という上記で示した1例のみ、同じく「ユウイチの親父」という実験文も4例あったが「ユウイチの親父の」という上記の1例のみであった。特に、「ユウイチの親父の」という実験文に関しては、NP1 と NP2 が1つの単位になったのが5回の発話のうち1回のみであった。以上のことから、非飽和的な名詞が現れた場合にその直前のゆすり音調が必ず消去されるといった強い制限はないと考えられる。今回の調査でいえることは、非飽和的な名詞が現れた場合にその直前のゆすり音調が、その直後のゆすり音調に優先して消去される可能性があるということのみである。

次に、NP2+NP3 が1つの韻律句となる時の条件について考察する。NP2 と NP3 が1つの韻律句となる時にも、統語的な構造としては[[NP1+NP2] NP3]である。それにもかかわらず NP2+NP3 で1つの韻律句となるのは、場所と人の NP1+NP2 よりも、所有者と所有物の NP2+NP3 の方が意味的なつながりが強固であることが要因となっていると考える。

以上から、属格の場合に1つの韻律句を形成する条件をまとめると次のようになる。

条件：3つの NP が並んで大きな NP を構成するとき、意味的に近い NP どうしが1つの韻律句となりうる。

#### 6.1.2. 名詞+助詞の連続体と動詞の間

名詞+助詞の連続体と動詞の間、つまり NP (PP)+V のかたまりにはゆすり音調が現れない。これは、[-Boundary][+Boundary]のいずれにも当てはまる。この場合、以下のようなかたちになる。

(9) ナオミの姉のワインをワイングラスで飲んだ。

(ナオミノ) (ネーチャンノ) (ワインオ) (ワイングラスデノンダンヤ)。

(10) ベルリンの友人が荷物を郵便局から送った。

(ベルリンノ) (トモダチガ) (ニモツオ) (ユウビンキョクデオクタンヤ)。

このとき、「ワイングラスで」という PP と「飲んだ」という V の間、「郵便局から」という PP と「送った」という V の間のいずれにもゆすり音調が現れない。この事実が何を示唆するのかを分析するために PP を省略した実験文のゆすり音調の位置を確認する。

(11) ナオミが姉のワインを飲んでしまった。

N1-NOM N2-GEN N3-ACC V

(ナオミガ) (ネーチャンノワインオ) (ノンデモータンヤ)。

(11) の統語構造は、NP1 (ナオミ) が主語(subject)、N2 (ネーチャン) と N3 (ワイン) が目的語(object)を示す NP (ネーチャンノワイン) を作り、さらに NP2+NP3 (ネーチャンノワイン) +V (ノンデモータ) で大きな VP となっており、NP1 と NP2 の間には大きな統語的境界が入っている。一方、韻律のまとまりは(N1-NOM) (N2-GEN N3-ACC) (V) となっている。

ここで問題となるのは、(11) が V のみで 1 つの韻律句を形成している点である。これは、基本構造として設定した [N1 N2 N3 PP V] という構造のときには、必ずゆすり音調が消去され PP と V が 1 つの単位となっていたが、PP が省略された場合には必ずしも直前の NP と V が 1 つの単位になる必要がないことを示している。ここから、ゆすり音調が消去される要因となる可能性として次のものが挙げられる。

可能性① : V の直前が PP の場合ゆすり音調は消去されるが、V の直前が目的語の場合ゆすり音調は消去されない。

(11) が基本構造の実験文 (V の直前が PP) と異なる点は、(11) は V の直前が目的語となる NP3 となっているのに対して、基本構造の実験文は V の直前が V をより詳しく説明する PP であるという点である。このことから、目的語と V の間にはゆすり音調が現れるのではないかと考えられる。ただし、(12) のようなこの仮説に当てはまらない例が存在する。

(12) ナオミの姉がワインを飲んだ。

N1-GEN N2-NOM N3-ACC V

(ナオミノ) (ネーチャンガ) (ワインオノンダンヤ)。

(12) の統語構造は NP1 と NP2 が主語を示す NP、NP3 と V が目的語を含んだ VP となっており、NP2 と NP3 の間には大きな統語的境界が入っている。また韻律は (N1-GEN) (N2-NOM) (N3-ACC V) というまとまりになっている。

(12) はこの文の目的語にあたる NP3 と V の間のゆすり音調が消去され、1 つの韻律句となっている。つまり、V の直前が目的語であるかという要因よりも大きな要因が存在する可能性が考えられる。

可能性②：統語的なつながりの強さによって、ゆすり音調の位置が操作される。

これを確認するため、(11) と (12) の統語構造と、統語構造によって現れる句について以下にまとめる。

(11) [ナオミが][[姉のワインを]飲んでしまった]。

(12) [ナオミの姉が][ワインを飲んだ]。

(11) は、N1 の「ナオミ」が「飲んでしまった」という V の動作主であることを主格によって示しており、単独で NP を構成している。VP については「飲んでしまった」という V の前に「ワイン」という V の対象物が対格によって示されており、さらに「ワイン」の属性について「姉」という名詞と属格を用いて説明することで構成されている。つまり、NP1「ナオミ」と「姉のワイン」から始まる VP の間には大きな統語的な境界が存在し、VP のなかの「姉のワイン」と「飲んでしまった」の間には小さな統語的な境界が存在すると言える。

(12) は、N2 の「姉」が「飲んだ」という V の動作主であることを主格によって示している。(11) と異なり「姉」の属性を N1 の「ナオミ」が属格によって示しているため、NP1 + NP2 で NP を構成している。また、VP については「飲んだ」という V の前に「ワイン」という V の対象物を対格によって示すことで構成されている。(12) は NP と VP の間に大きな統語境界が存在する。

ここで、(11) と (12) の統語と韻律のまとまり方を比較する。

(11) [ナオミが][[姉のワインを]飲んでしまった]。

(ナオミノ) (ネーチャンノワインオ) (ノンデモータンヤ)。

(12) [ナオミの姉が][ワインを飲んだ]。

(ナオミノ) (ネーチャンガ) (ワインオノンダンヤ)。

(11) は、統語的なまとまりと韻律的なまとまりが一致している。(12) も NP と VP の間の統語的境界と韻律的境界については一致している。以上のことを踏まえると韻律的なまとまり

まりが統語的なまとまりと一致して現れていることから、Vの直前のNPとVの間のゆすり音調の消去される条件について、統語的な側面から説明が可能となる。

条件：統語的な句を形成する文節間ではゆすり音調が消去されることがある。

これは、石原（2014）で述べられていた統語・韻律写像原理に沿った条件である。以上のことから福井方言においても基本的には統語・韻律写像原理は適用されると考える。

ただし、この条件でも説明できない実験文が以下の文である。

- (13) [[ユウイチの親父の家を]売り払った]。  
(ユウイチノ) (トーチャンノ) (イエオウツタンヤ)。

この文は統語と韻律が異なるまとまり方をしている。これについては、属格の問題と結びつけることで、ある程度の説明が可能である。N2は非飽和的な「親父」であるため、韻律句を形成するとしたらN1の「ユウイチ」とともに形成すると予測されるが(13)では1つの韻律句とはなっていない。3つのNPのなかでもっとも意味的結びつきが強いNP1とNP2が1つの韻律句になっていないのにもかかわらず、NP2がNP3と1つの韻律句になるとは考えにくい。一方で、NPが目的語であるかということは関係なくVPは前にあるNPと意味的につながっているため、1つの韻律句になったと考えることができる。

ただし、今回の調査では、語用論的側面をうまくコントロールしきれなかったために、普段発話しないような内容が不自然な音調として現れたという可能性がある。特に、実験文2の「人の家を売る」というイベントは関わる機会が少なく、普段発話しない内容の文であったため、統語と韻律が異なるまとまり方をしたという可能性が否定できない。しかし、(13)のようなまとまり方をする要因が別のところに存在する可能性もあるため、さらなるデータを得て分析する必要がある。

### 6.1.3. フォーカス以降のゆすり音調

フォーカス以降の音調については5節で述べた通り、ゆすり音調と下降音調のいずれも消去されている。具体的な音調曲線は以下のとおりである。

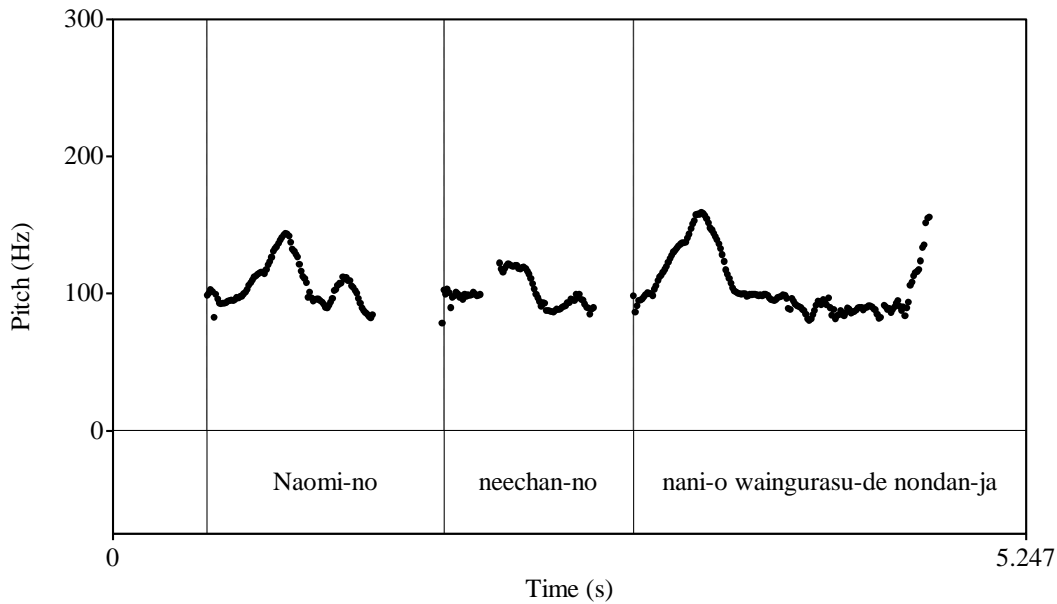


図4 「ナオミの姉の何をワイングラスで飲んだの？」のピッチ曲線

フォーカス以降の音調を見てみると、フォーカスの nani-o のあとに急激にピッチが抑えられ平坦な音調が続いたあと、文末音調でピッチが上昇している。前川 (1990) は福井方言の疑問詞疑問文について、「途中でピッチの上昇をしめさずに末尾にいたり、そこではじめて文のモダリティによる上昇をしめす」(p. 90)と指摘している。今回得たデータは、前川 (1990) の指摘と一致している。

前川 (1990) は、東京方言における疑問詞疑問文の音調について疑問詞を含む NP と述部の間のイントネーション句境界が削除されてしまうか極端に弱化してしまい、発話全体が実質上1つのイントネーション句となる(p. 90)、と述べている。今回得られたデータも、NP と述部の間の韻律的な境界はゆすり音調と下降音調のいずれも消去されており、東京方言と同じ規則に従っているといえる。

この規則について、郡 (1997) は「フォーカスがある語のアクセントの高低変化が強調され、同時にそれより後にある語群のアクセントの高低変化が抑えられる」(p. 173)とまとめている。郡 (1997) は東京方言におけるイントネーションの規則としてまとめていたが、無アクセントの福井方言に合わせてこの規則をまとめると、以下の通りになる。

規則：フォーカスがある語のピッチを高くすることで強調し、同時にその後にある語群のピッチの高低変化は抑えられる。

この規則によって、福井方言のフォーカス後の音調はピッチの変動が抑えられるため、ゆすり音調と下降音調のいずれも消去され、ピッチが低く抑えられた平坦な音調となる。

## 6.2. まとめ

今回得られたデータから、ゆすり音調が文節末から消去されて 1 つの韻律句となる条件を以下の 3 点にまとめる。

①3 つの NP が並んで大きな NP を構成するとき、より意味的に近い関係の NP どうしがまとめて 1 つの韻律句となることがある。

②統語的な句を形成する文節間では、ゆすり音調が消去され 1 つの韻律句となることがある。

③フォーカスがある語の後の音調はフォーカスが現れた際の規則によってゆすり音調と下降音調のいずれも消去され、1 つの韻律句となる。

①は意味構造、②は統語構造、③は情報構造と関わる。③は必ずゆすり音調が消去されるのに対し、①と②はゆすり音調が必ず消去されるわけではない。①と②を比較すると、②の条件でゆすり音調が消去される時、①の条件によってもゆすり音調が消去されるが、②の条件でゆすり音調が消去されないときに①の条件でゆすり音調が消去されるということはない。以上のことから、①～③がゆすり音調に与える影響力には差があるといえる。影響力の強さは③>②>①の順に弱くなっている。以上のことから、福井方言における韻律句の境界設定について次のようにまとめる。

福井方言における韻律句境界の設定：

福井方言の韻律句境界の設定には意味構造、統語構造、情報構造のいずれも関わっているが、その関与する程度には差があり、情報構造>統語構造>意味構造の順で関与している。

## 7. おわりに

本稿では、福井方言における句切りの音調について記述をした結果、ゆすり音調と下降音調という 2 つの音調があり、ゆすり音調によってまとまる句と下降音調によってまとまる句の 2 層の階層構造が存在することが明らかになった。また、上の層であるゆすり音調によって形成される韻律句についてどのような条件で形成されるのか精査した。結果として、6.2. に示す条件の下で形成され、情報構造>統語構造>意味構造という順で韻律に対して影響を与えているということが明らかになった。

本稿では、下降音調によって形成される韻律的な句についての条件を精査することができなかった。これを明らかにすることは今後の課題である。

【参考文献】

- 石原慎一郎 (2014) 「日本語の統語とイントネーション」『日本語学』 33-7 pp. 16-27
- Ishihara, Shinichiro (2016) “Japanese downstep revisited” *Natural Language Theory* pp. 1389-1443
- 加藤和夫 (1992) 「福井県方言」 平山輝男編『現代日本語方言大辞典』 1 pp. 159-163 明治書院
- 郡史郎 (1997) 「日本語のイントネーション」 杉藤美代子監修『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』 pp. 169-202 三省堂
- Kubozono, Haruo (2007) “Focus and Intonation in Japanese; Does Focus Trigger Pitch Reset?” *Interdisciplinary Studies on Information Structure 9*: pp. 1-27 University Potsdam
- Ladd, D. Robert (2008) ” Intonational phonology” Cambridge, UK: Cambridge University Press, 2nd edition.
- 前川喜久雄 (1990) 「無アクセント方言のイントネーション (試論)」『音声言語IV』 pp. 87-110 近畿音声言語研究会
- 松倉昂平 (2022) 『福井県嶺北方言のアクセント研究』 武蔵野書院
- 新田哲夫 (1987) 「北陸方言の間投イントネーション」『金沢大学文学部論集 文学科篇』 7 pp. 19-48

## 【付録】 実験文一覧

人名はカタカナ、地名は漢字で表記している。

### 実験文 1

- a ナオミの姉のワインをワイングラスで飲んだ。
- b ナオミの姉の何をワイングラスで飲んだの？
- c ナオミの姉がワインをワイングラスで飲んだ。
- d ナオミの姉が何をワイングラスで飲んだの？

### 実験文 2

- a ユウイチの親父の家を売った。
- b ユウイチの親父の何を売ったの？
- c ユウイチの親父が家を売った。
- d ユウイチの親父が何を売ったの？

### 実験文 3

- a ベルリンの友人の荷物を郵便局から送った。
- b ベルリンの友人の何を郵便局から送ったの？



c ベルリンの友人が荷物を郵便局から送った。

d ベルリンの友人が何を郵便局から送ったの？

#### 実験文 4

a ヤマモトの隣人の母屋を装い新たに建て直した。

b ヤマモトの隣人の何を装い新たに建て直したの？

c ヤマモトの隣人が母屋を装い新たに建て直した。

d ヤマモトの隣人が何を装い新たに建て直したの？

#### 実験文 5

a 上野の物乞いのライターを駅前広場で見つけた。

b 上野の物乞いの何を駅前広場で見つけたの？

c 上野の物乞いがライターを駅前広場で見つけた。

d 上野の物乞いが何を駅前広場で見つけたの？

PP を省略したものと主格を N1 と N2 の間に置いた実験文

#### 実験文 1

e ナオミの姉がワインを飲んだ。

f ナオミの姉が何を飲んでしまったの？

g ナオミが姉のワインを飲んでしまった。

h ナオミが姉の何を飲んでしまったの？

## 実験文 2

e ユウイチの親父が家を買った。

f ユウイチの親父が何を売ったの？